

北辰・衆星に思うこと

堀内康人

北辰居其所、而衆星共之

巧言令色、鮮矣仁

右の言葉は紀元前四、五百年前の時代を生きた中国の孔子様が言った言葉であります。私どもは旧制中学の頃、漢文の時間に姿勢を正してよく読まされたものです。どこかのうなぎやの座敷の床ノ間に、作家の井上靖が色紙に書いた北辰言々が飾ってあり、それを読んだ時の感動をいまだに忘れません。さてお若い方々は読めないといけませんから、最初、読んで見ることにいたしましょう。

「北辰（ホクシン）その所に居りて、衆星これにむかう。」
次に「巧言（コウゲン）令色（レイシヨク）鮮（スクナシ）仁」

と読むのです。最初の言葉の前には為政以德、譬如という言葉があるのですが、政治をするのに道徳によっていけば、ちようど北極星が自分の場所において、多くの星がその方に向つてあいさつしているようなものだ、ということですが。次の言葉は、言葉たくみで顔つきだけよいのでは、仁の徳はほとんどないものだよ、仁の徳というのは、今様の言葉でいうなら、人間の根源、ヒューマニズム、愛などといってもよいでしょう。

ところで藪から棒にこんな古い言葉を出して来たのにはこんな理由があります、それはこの二つの言葉が、幼児教育にたずさわる保育者にも実によくあてはまるということです。

子どもが登園する前に保育室の環境をきちんと整え、やって来る子どもたちがなにごとに興味を示し、なにをはじめるだろうという予想をたてることの出来るような保育者の部屋では、保育者はお部屋の北極星、子どもたちは輝く星の様に美しくまたたき、一生懸命でなにかをやりながら、いつも北極星に視線をなげ、困った時には助けを求めて近よる、北極星は言葉すくなではあるが（星の子が沢山いるので一人の子に多くかわり合うことはできない）静かにあなたかくしかも適切なアドバイスを与え、それによって星の子たちはいつそうキラキラ輝き出す、といった夢とロマン、子どもたちの体の中に、ぐんぐんと伸びて行く力と喜び、お互が尊重し合いながら生き生きと活動する保育状況をこの言葉がもっている様に思ふのです。

それに反して次の言葉はどうでしょう、保育の環境は雑然として玩具箱をひっくりかえしたような有様、保育室の中間が運動場同然、子どものハイビッチなさわぎが耳をつんざき、保育者が金切声で注意を与え、あたかも喧噪曲の埒塙、こうした保育室では、きまってる保育者はお集りのあとにさせる製作の準備を、子どもの自由遊びの最中にやっており、時々鉢

合せをした子どもの額に手をあて、「大丈夫たいしたことないわ、泣かないでやりましょう」といったり、部屋の隅っこで危険をさけるように小さくなって絵を描いている子どもにもむかって、大声で、「しっかり描きなさいよ、いい絵が出来るわよ」、などと、うわべばかりの励ましの言葉や、とりつくりった喜びの表情をつくり、見学者でも来ようものなら、この子どもはどうだあの子はどうだと、いかにも学問的な用語で子どもの状況を説明はするが、仁の心、言うなればひとりびとりの子どもにそそぐ、あなたかな視線もなければ、教育的配慮もない保育者の姿を示しております。

近頃の政治家には孔子様のおっしゃる通り北辰などという高貴な姿は望むべくもなく、口先だけけうまいことをいって、事実をおおいかくし、それで平気な顔をし悪を重ね、えらそうにふんぞりかえり国民の税金を使って、奥方までつれて外国旅行をする政治家が沢山おる御時世、幼稚園や保育園にも子どもの親の御機嫌ばかりうかがい、見栄えの良い保育に浮身をやつすような巧言令色の園長や保育者があるとすれば、これは一大事である。ということを書いたかったのであります。妄言多謝。

（東京家政大学）